木の葉経

勝又進

かな かな かな かな
かな かな かな

ペッ

かな かな かな かな かな かな かな かな

かな
かな
かな
かな
かな
かな

かな
かな
かな
かな
かな
かな
かな

ぽっく
ぽっく
ぽっく
ぽっく
ぽっく

はぁ
いいメロディだなぁ
ぽっく
ぽっく
ぽっく
ぽっく

子守唄のようだ

ガヤ
ガヤ
ガヤ

ガチャ

わっ
ゴ

ガラァーッ

りょうぜんッ！
良全ッ！

しくしくしく

とっとっとっ

しく
しく
しく
プッ

リョウゼンッ
これ
りょうぜんッ

ははは
は
ギギギ

その日から
良全さんの様子が
ヘンになった

小食のカレが
夕めし五はいも食
べた
おまけにおわんに
は歯のあとまで
ついてた
ガリ
ガリ

ひやぁつ
フッ

あれほど静かだった良全さんがちょろちょろうろつき回ったりゲラゲラ大声で笑ったりするようになった
同室の安念には日頃からなにかとよくしてくれていたので彼はこのことを大そう心配した

最近良全さんの様子がおかしいとは思わないか
おかしい

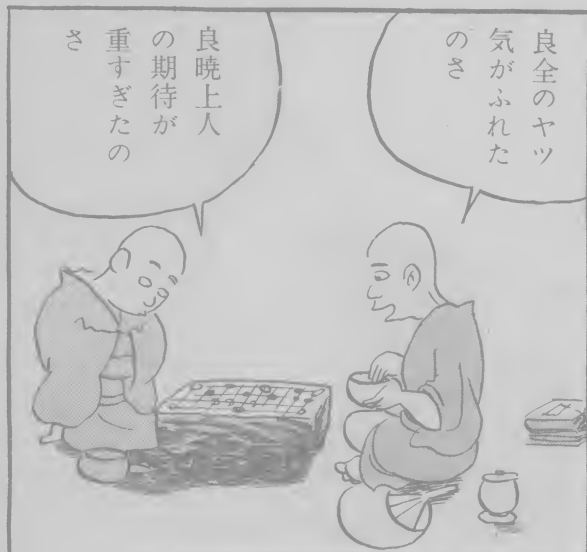
おれのこと安念と呼んだ
おいらのことも安念といった

ボケてるんだ
うんボケてる

それもその筈だ彼にはどの顔も皆同じに見えたもんだ

朝も暗いうちに起きだして庭のすみずみまでなめるように掃除をした当番の小僧達にとってはいいメイワクだった

小僧のなにがしは良全さんが庭隅にウンチをしているのを目撃した

良全のヤツ気がふれたのさ
良暁上人の期待が重すぎたのさ

もともとあいつは住職になれる器量じゃあなかったんだ
そうなかったんだ

真相を知っていたのは小僧の安念さんと上人のおかみさんだけだった

彼女はといえばさすがに責任を感じて悩んだらしく二貫目もやせてしまった

それでも心配のあまりちょくちょく様子を見に忍び込んできていたようだが

そのたびに生キズだらけになって逃げ帰った

そうこうしているうちにとうとうねこんでしまった

あかげろう

良全さんは
虫が好きだっ
たので
ふう
こんな時は
安念も
ちょっと
安心するのだが

ポイ

すべてが
こんな具合
なんだ
もしゃ
もしゃ

夜は遅くまで
写経等をして
いるようだ
これも良全さんの
習慣である

ちょ
ちょ
ちょっ

ぎゅ

ペッタ
ペッタ
ペッタ

ちっ

時々
ほうと
ため息なんかついてる
恍惚としている
様子だ

スーッ

こんな時分
にいったい
どこにいくん
だろう

厠にしては
長すぎる

おや？
だれかが
お経を
あげてるぞ

ようく聞いてみると
どうやらお経でもないら
しい。
声の調子がとてもお経
に似ているんだ
こぶしのきいた
すばらしいお経
だった

良全さんは経本と
にらめっこしている
んだけど
ポーズだけら
しい

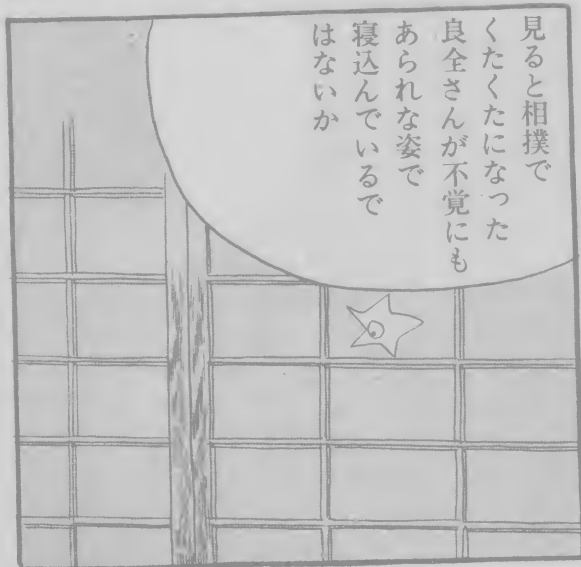
お経を聞かさ
れると眠くなる
安念だったが
この時ばかりは
さすがに
ホロッときてし
まった
ホロ

おおおおん

んんんんんんんんんん

それから一年目
とうとう
良全破綻の
トキがやってきたんだ
あれは
盆あけの恒列
相撲大会の
あとのことだ

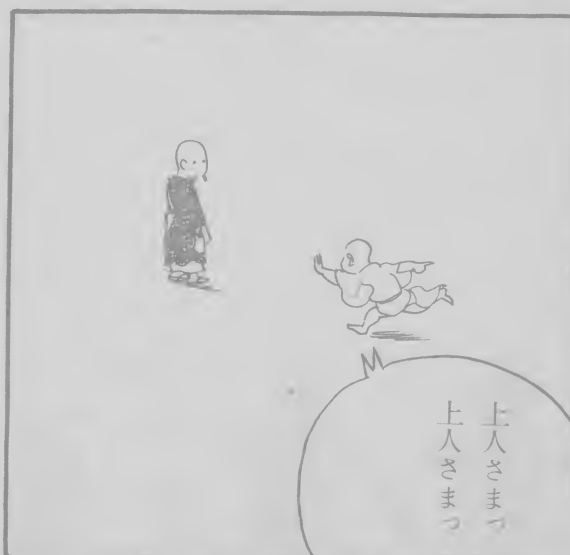
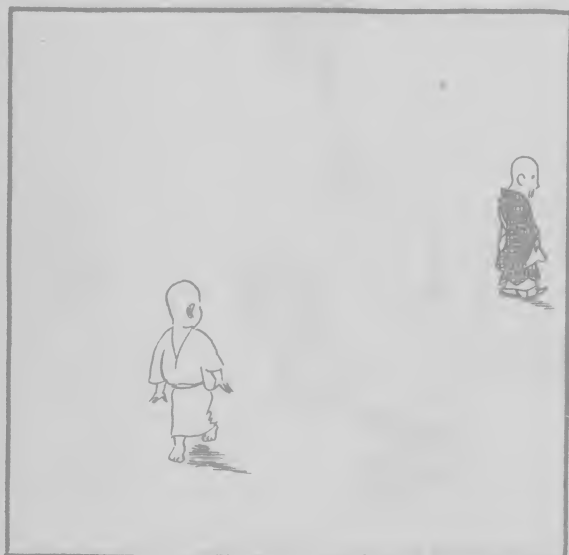
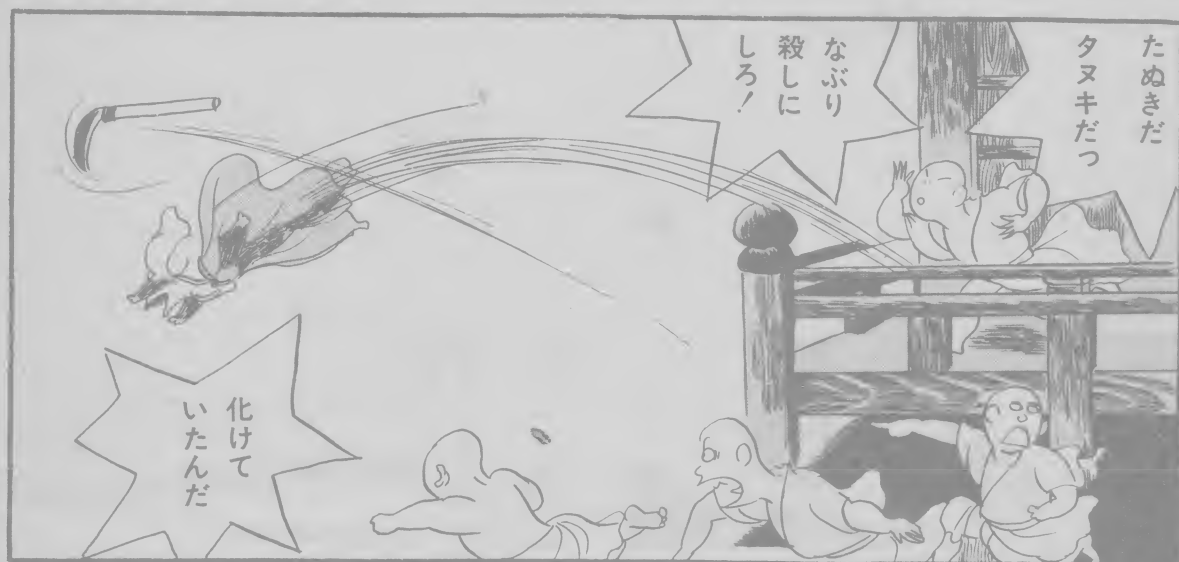
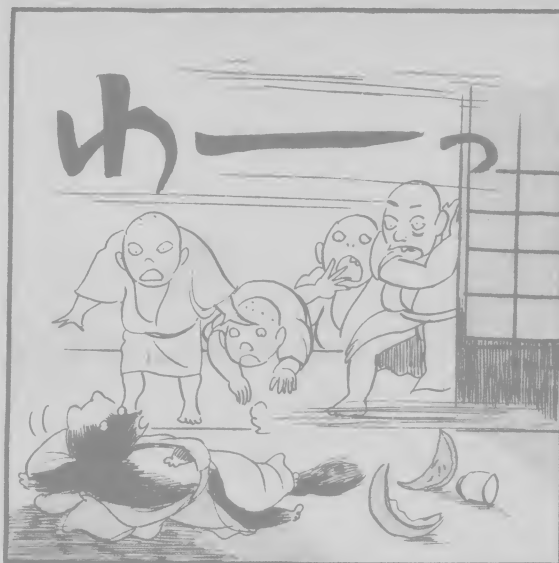
ゴォーッ

良全さんの部屋
から雷のような
いびきが聞こえ
てきた

見ると相撲で
くたくたになった
良全さんが不覚にも
あられな姿で
寝込んでいるで
はないか

ワーーッ

わーーっ

たぬきだ
タヌキだっ
なぶり
殺しに
しろ！
化けて
いたんだ

上人さまっ
上人さまっ

だまれ
だまれ
狸とて
甘く
みるなよ

狸には
人間にはない
神通力ってもの
があるんだ

その気になれば
御三尊様だって
この神通力でお
招きすることが
できる

このお
へらず口を
たたきおって
ひきずり
おろせ

フン
法力とな
？
おまえらの
法力が
通じるのは

石のじぞさん
か
檀家の後家
さんか
ぬぬう
裂いて
しまえ

だまれ
だまれ
こじゅうとめっ!!

あははは
最後に
なにかひどく
罵倒した
様子だったが
狸語だったので
だれにも分らな
かった

帰っても
又
つらく
なる

チッ
チッ
チッ
チッ

チッ
チッ
チッ
チッ

うふふ
いかしたなあ
あの
すてぜりふ

ウ

こーれかねっ
たまるかねっ
ゆんべのゆうめに
ねえこ
ちゃっ　ちゃっ
かわいいあのこの
てをひーて
おんしゃなんなら
おこしばてーんよ

良全は狸に食い殺されたのさ

あいつは水海道あたりで名うての古狸だそうだ

おれは見たんだ蓮池で蛙をくってた

第二のじけんが起こったのは夏も終りちょうどかなかなが最後の合掌をしているころだ

カナ カナ カナ カナ カナ カナカナ

カナ
カナ
カナ
カナ
カナ
カナ
カナ
カナ
カナ

どかーーん

本堂の方だ
いってみろ

あ———

ナンマイダ
南無阿弥陀仏
なむまいだ
なむあみ
ナンマイダ
無阿弥陀
なんまみだ
あみだ
ナンマイダ

ガーン
ヒーーーッ

しいーーん
ナムアミダブ
ナムアミダブ
ナムアミダ
ナムアミダブッ

チロ

こやつの仕業だったのか
あがきおって
白米が恋しくてもどってきたのだ
ギュ

しんでる

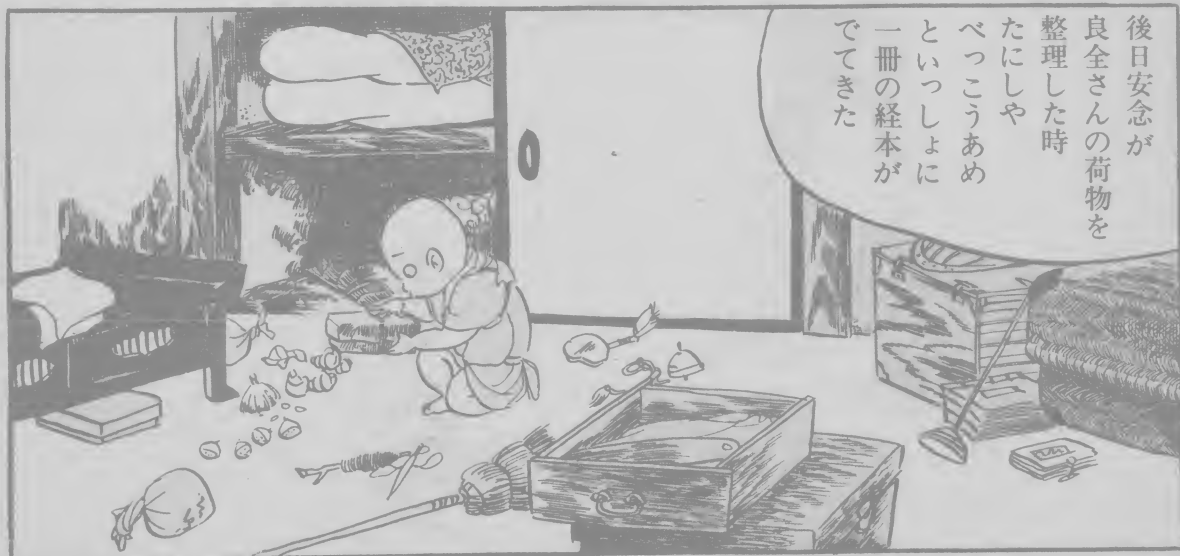
おそれ多くも
ナムアミダブ
ナムアミダブ

御三尊様に化けるなどと
とんでもないヤローだ
ボカッ

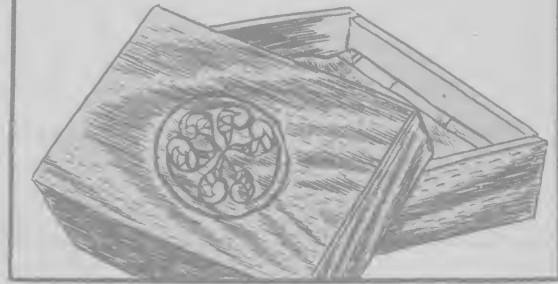
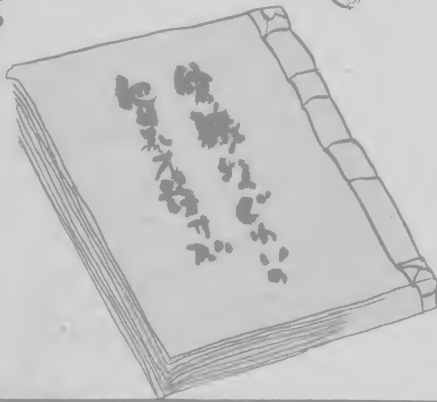
バチがあたったのだ
御堂が汚れるうずめてしまえ
ゴゴーン

せんころのことをネにもっていたんだ
一年も大めし喰っていたんでずっしりと重いぞ

みろよふてぶてしい

没年不詳
戒名
浄園狸磧信士
凶年とって四才男盛りであった

後日安念が良全さんの荷物を整理した時たにしやべっこうあめといっしょに一冊の経本がでてきた

葵の紋章の
ついた
立派な桐の箱に
入っていて

表には
「住職
以外ノ
他見オ
許サズ」
なんて
書いてある

良暁上人が読んで
見たけど
さっぱり分からなかった
そうだ
筆跡定まらず
おまけにところ
どころ狸文字が
まじっているらしく
とても読めるような
しろものではなかった
そうだ

あちこちに
涙のあとが
あるのは
書いている
うちに
カンゲキ
してしまった
せいだ

もしかしたら
これは
経本じゃなくて
彼の日記みたような
ものかもしれない

弘経寺の庭の片隅には
カレを祀った良全堂が
のこっている

おしまい